

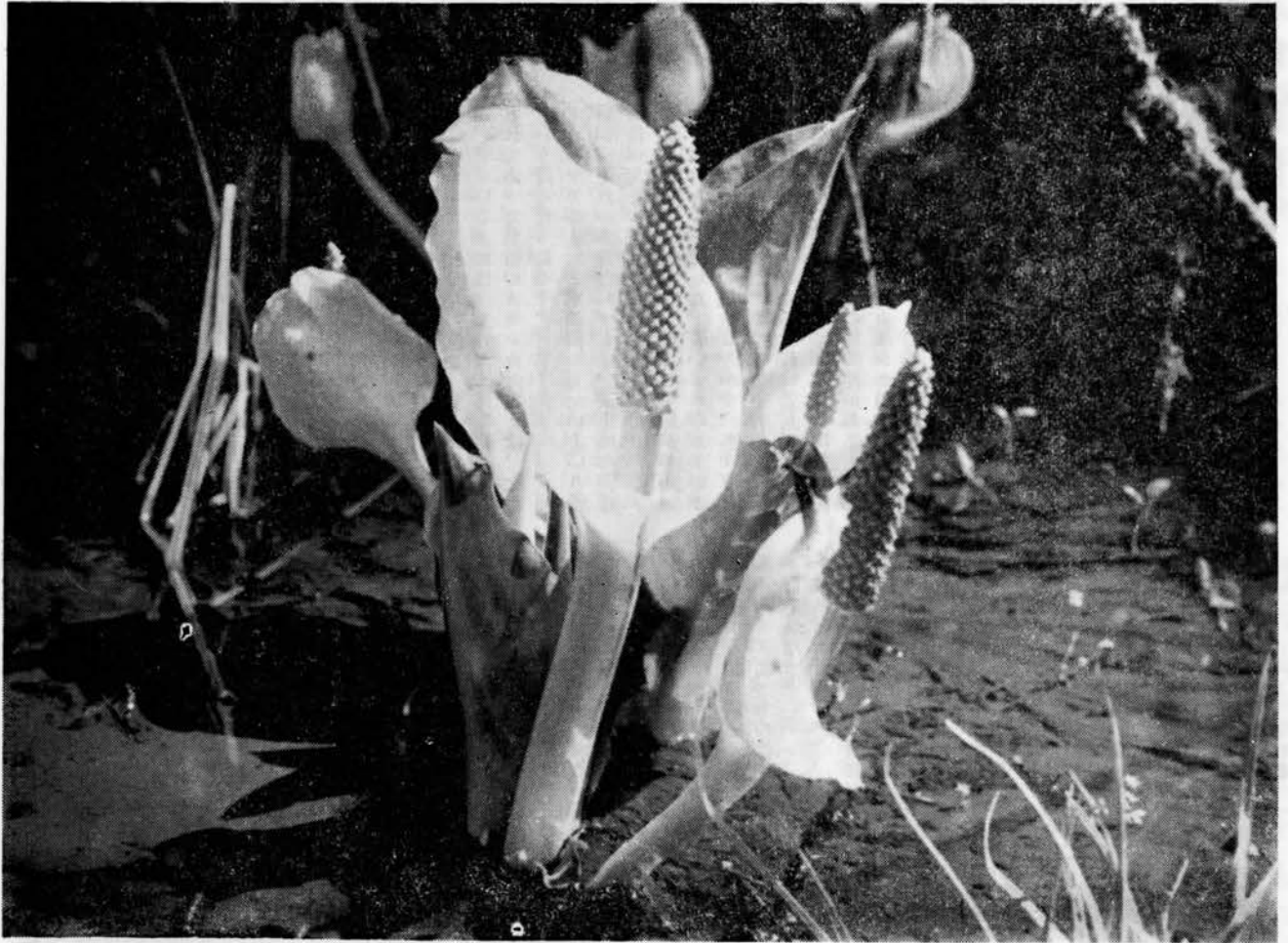
山と博物館

第14巻

第51号

1969年5月25日

大町山岳博物館



居谷里湿原に咲くミズバショウ（5月上旬）

撮影 平林国男

観光のしわよせ

レジャーブームは自動車の発達と共に年毎にその伸びをみせ、特にマイカー族が続々と観光地を屈指す昨今である。北アルプスの麓も例外ではない。

マイカー族の増加率はすぎまじい限りで、狭い道路に満ちあふれ、目的の観光地は駐車難でウロウロする。

探してどこかに駐車できればまだ良い方、探した果に元に引き返さなければならぬはめになり、わざ／＼駐車場探しに来たような錯覚に陥る。

車ひとつの例をとってさえもこの程度である。観光行政は、基本計画をより進んだ新しい構想にもとづいて二〇年先、五〇年先の事を考えたものでなければならぬ。それにはおざなりのごまかしの小手先計画では雄大な自然を控えた観光資源に対して申し訳ないというものであろう。

又観光地にはならぬとする広告の類、それも周囲の環境を考えに入れなれどぎつものはなはだ多い。

特に自然の景観の美しいところでは、まったくのブチこわしの存在である。

広告は文化のパロメーターであると、人の行くところ、広告が行くこの頃であるが、自然環境内での広告の規制がされても良いと思う。

毎日の街の広告と雑踏からのがれて来た人々への本当の思いやりはそんなところにあるのではないだろうか？

自然と調和したコマーションナル抜ききのテール、イス、説明板ETC:

文化国家、日本にそんなところがあっても悪いことではあるまい。

生存競争の激しい現代にこんな事を考える方がおかしい事かも知れないが:

一人位はいてもよからう。

(千葉彬司)

山の動物たち

私の創作に関連して——

岡野 薫 子

残雪の輝く北アルプスの峯々を見あげたのは、あれは三年前の五月であつたらうか。

その頃、私は、カモシカと少年の物語を書こうと思いたち、取材のため、当地を訪れたのであつた。

日本のカモシカは数が少なくなり、天然記念物に指定されている。それはそれとして、幾多の問題を含んでいるが、当時、私の頭を強く占めていたのは、野性の動物を飼うことから起る、様々な事柄だつた。

これより前、私は、ヤマネコを物語の主人公に、非常に孤独でありながら、自由な空気の中に生きている、野生の魅力を探つてみた。ヤマネコはもろさにも通じる強靱さをもっている。そのことを、私は、すばらしいと思つた。人間の一つの生き方を暗示しているように思つた。

そして、次には、これが他の動物ではどうだろうか——と、考えた。

人に飼われ、自由を束縛されている限り、動物はやがて、無気力になり、野生の生命ともいふべき張りのある美しさは消えてしまふに違いない。だが、そんな状態におかれていても、なお、野生の魂をもちつづけているとしたら……

その日——爺ヶ岳や白馬岳を仰いで、遠い祖先から語り伝えられたという残雪の幻像の話をきき、また、昔の猟師が使用したという、カモシカ皮の背負い袋、あし皮、てぶ皮などを、山岳博物館で見せてもらった。そこにはまた、明神池でイワナ釣りをしている人の、茶色に変色した写真もあつた。思えば、これらのイメージがかさなつて、カモシカと

少年の物語、カモシカの谷の舞台ができあがつていったのである。

山岳博物館では、その頃、一頭のカモシカを飼つていた。おとなしい白いカモシカで、すべすべした毛の感触といい、カモシカというより、ヤギの感じに近かつた。金網にこんで傷めたという角の先が、虫こぶのような、まるいこぶになつていた。博物館に展示されてあつた剥製のカモシカたちとは、なんと違うだつたらう。

カモシカのもっと別の姿を見たいという希いが、それから日ならずして、三重県の御在所岳へ足をのぼすきっかけとなつた。

六月、御在所岳の山上は、こい霧がかかり晴れたりしていた。若いメスのカモシカ、その式典の日だつた。カモシカ小舎のまんに、しめ縄が張りめぐらされ、二人の巫子さんがサカキの枝をかざして舞つた。神主の祝詞もあげられた。地元の新報社からきていたらしいカメラマンが、カモシカのほうを見ながら、「食われると思つてるんじゃないのかな」と、小声でつぶやいた。カモシカは、生真面目な顔つきで、じっと、こちらのようすをうかがっているのだつた。

カモシカは、ここで生まれたそうで、飼育係の伊藤さんに、よくなつていたが、それでいて、野生の美しさを、なお十分にもつていた。カモシカの両親は、別の広い囲いの中にいたが、これは、警戒心の強さをそのまま見せて、決して近寄ろうとしなかつた。灌木の茂みをはねとんで、じき、霧の中にかくれしまつた。ちょうど毛変りの時期で、みな、

ぬけた綿毛のかたまりを、からだのあちこちにぶらさげていた。まるで、ほころびた綿入れのように見えたが、自然の林の中では灌木の枝にくしけずられて、いつのまにか、きれいな夏毛に変わるとのことだつた。これらのカモシカに会い、伊藤さんの話をつぶさにきくことができたのは、大きな収穫だつた。

御在所岳の麓にすむ二人の猟師にも会つたが、この人たちの話は、また独特で、面白かつた。「シシのやつはばかなんだ」と、いつたりしたが、それは、カモシカが寒立ちをしてる時、容易に猟師を近寄せることを指す言葉だつた。

現在では、カモシカは禁じられているから、猟師の話はひとりで、シカのほうへと移つていった。

山上のカモシカ小舎の隣に、捕えられて間もないシカがいて、私は、その美しさに魅せられたばかりだつた。こい霧の中から、大きなうるんだ瞳で、じっとみつめられた時、カモシカの精々という感じが強くした。シカはそれほど清々しかつた。汚れに染まらない少年の心、そのものという感じだつた。

「シカを追う時とイノシシを追う時じゃ、おそろく、こちの顔つきも違つてゐるんじゃないかな」

と、猟師は、いつた。

冬山にシカを追う猟師も、また、美しさを追い求める人たち——と、いえるのではないか。そんなことを、この時、ふと思つたのであつた。

つい先頃、私は、林野庁の鳥獣実験場に、キジの養殖を見学に行った。キジは猟鳥に定められている。ここで育てられたキジたちは行く行くは自然の山野に放たれて、猟銃に撃たれる運命にある。つまり、撃たれるために育てられているのである。

人工孵化による大量生産で、何十何百というキジのひなたちがビビヨウごめいしているのを見ては、何の感動もおこらなかつた。これだけ数が集まると、そのものが生きていく感じさえ、稀薄になつていくのであつた。

これらのキジが山野に放たれた時、彼等はまず、自分の力で餌をとることから覚えていなくてはならないだらう。また、強い雨が降つたとして、それに耐えらるるだらうか。キツネやイタチ、タカなどから逃れる術を知っているだらうか。地付きの野生キジとのなわばりの問題もあるはずである。しかも、彼等は、結局は、人間の手に撃たれてしまふのだ。そんなことを考えながら見ていると、温室育ちのキジたちが、如何にも哀れに思えてならなかつた。

昔、狩猟は、人間の生活に直接結びついたものだつた。そこには、動物対人間の、敵しい対決があつた。

今の狩猟はどうだらう。生活との直接的な結びつきはほとんどなくなつてゐる。狩猟はスポーツという考え方である。しかも、とるために、人間の手でふやす。これでは、安易に撃つという欲求は満されるかもしれないが、釣堀の魚を釣るにも似て、如何にも空しい感がある。

だが、考えようによっては、人間の手でふやされたキジがいることで、本来の野生キジが保護されることになるのである。養殖キジの中にも、或いは野生化して生きのびるものがあるかもしれない。つまりは自然の美しさを保つ上に役だつたから……と、私は自分を納得させようとした。——が、それでいい、なお、わりきれない気持の残るのはどうしようもなかつた。

かわいそうな動物がふえていくのも、野生の動物がへつていくのも、畢竟、人間の罪としかいようのない気がする。このことは、私のこれからの創作のなかで、ゆっくり考えしてみたいと思つている。

(作家)

(主な参考文献)

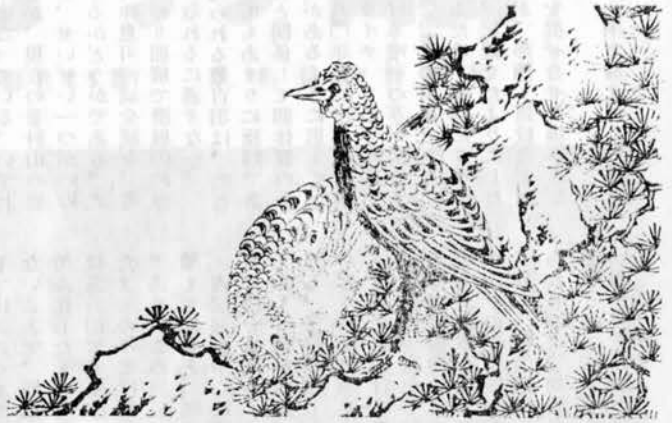
「ヤマネコのもようだ」「カモシカの谷」「シカをよぶ」「わたしのカケス」など

(以上、実業之日本社刊)

まぼろしの鳥

八ガ岳のライチョウ

平 林 国 男



古書「信濃奇勝録」にてくる写生図

たところ「八ガ岳にはライチョウはいない、何かの間違いだろう」と信じてもらえなかった。そこで早速撮影した写真を仕上げ、発見の事実を一笑にふされた同宿の人達は下山してしまっただけかも知れないと前置きし、二枚の写真を高見石小屋管理者の梶柴太郎氏宛送付してきた。

この写真と手紙は梶氏によって直ちに大町山岳博物館へ送り届けられ、雌雄二羽のライチョウであることが確認された。その後、この二人の女性を訪問した南信日日新聞社小池博之氏によって撮影時の詳細な情報が集取され、二人が歩いたというコース順に撮影されている写真ネガの検討により、事実は確認のもてものとなった。

▼天狗岳で撮影されたライチョウ
八ガ岳連峰はかつてライチョウが生息していたが、その後絶滅して現在では見られないという見方が通説となり、ライチョウの種族は完全に死に絶えてしまった山岳と考えられていた。しかし、昭和の年代に入り、数年おきあるいは一〇数年おきの間隔で時々発見され、そのつど八ガ岳の話題をにぎわしてきた。

昨年(昭和四三年) 東天狗岳で二人の女性登山者によってライチョウが撮影されたのもその一つである。二人の女性は愛知県蒲郡市在住の広中安江、竹内章恵さんで、五月七日、黒百合平からスリベチ池を経て東天狗岳(標高二六〇〇呎)に向う途中、午前一時頃、東天狗岳の登山路脇にいた二羽のライチョウを発見した。広中さんは北アルプス白馬岳でライチョウを見ており、直感的にライチョウだと思ったという。

二人はその日は高見石小屋に宿泊し、たまに同宿した他の二人の登山者にその話をし

影されたのは五月一七日であり、発見された

糞跡とはほぼ同じ時期にあたっている。二人の女性に撮影されたライチョウは、この糞と二枚の写真を残し、謎めいた幾つかの問題を投げかけたままいずこへか消え去ってしまったことになる。

▼ライチョウ絶滅説への疑問
今回の天狗岳騒ぎは別として、八ガ岳のライチョウは通説どおりにはたして絶滅してしまっただけであらうか。

絶滅説を提唱した最初の研究者は、信州における博物学の泰斗矢沢米三郎氏である。氏は動物植物の研究者として、また登山家としても著名であり、明治中頃から信州の諸山岳を踏査し、それらの山岳に分布する動植物についての著書や研究物を数多く残している。ライチョウについても詳細な調査研究を行い「山を思う」第二輯(大正一五年一九二六)で長年にわたる研究を集大成している。この報告は後に出版された「雷鳥」(昭和四年一九二九)の下原稿になったものである。

報告中のライチョウの分布に関する項では生息山岳のすべてを異別に列挙し、「八ヶ岳立科山には古之を産せし由、文書に散見して居るが、現在其姿を見ることは出来ぬ」と述べ、初めて八ガ岳のライチョウの履歴を明らかにした、しかし絶滅した時期や理由については明らかにされていない。

矢沢氏による絶滅説はそのまま世間に受け入れられこれに疑問をはさむ人がいないまま通説となり、それ以後の報告はいずれを見て「かつては八ガ岳にいたが今はいない」といった記述となっている。

文献の項には参考にしたすべてのものが列挙されているが、そのうち八ガ岳に関する古文書では、明和八年(一七七二) 信陽源著「

信濃地名考」。

享和元年(一八〇一) 華誘居士著「遠山奇談」。天保五年(一八三四) 井出道貞著「信濃奇勝録」があげられている。矢沢氏はこれら古文書を論拠とし、氏自身の数次にわたる調査登山の際、ライチョウの姿を発見できなかった事実から絶滅説を唱えたものと思われる。

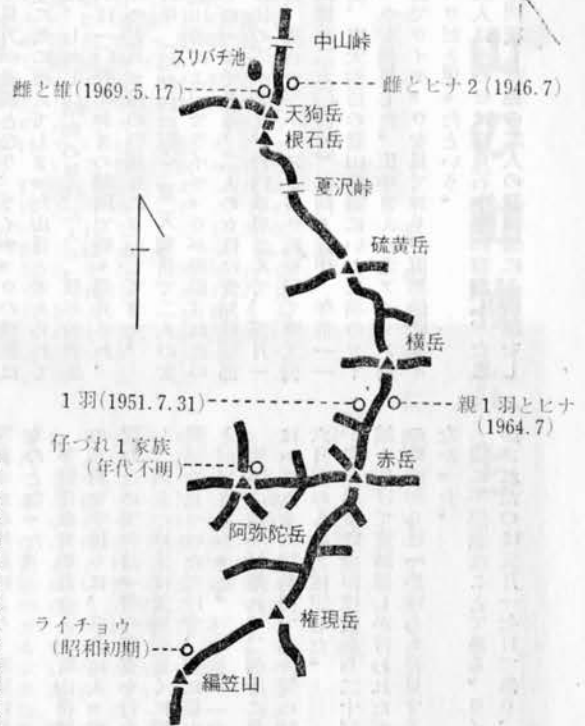
八ガ岳のライチョウに関する古文書には、この他瀨下敬忠著「千曲之真砂」宝曆三年(一七五三)。小岩高右衛門著「諏方かこの」宝曆六年(一七五六)。葛上源五兵衛著「木の下蔭」安永八年(一七七九)。吉沢好謙著「四隣譚藪」(年代不明)。筆者不明「信濃国立科山略伝記」(年代不明) などがある。

これら古文書のうち幾つかは他の古文書からの引用で、時には著者自身が経験したかのように面白い読物風に改変したものもあり、信用できるのは「千曲之真砂」「諏方かこの」「木の下蔭」「信濃地名考」だけである。以上八編のうち蓼科山に関するもの五、蓼科山を主に付記的に乗鞍岳にふれているもの一、南ア駒方岳を主に蓼科山にふれているもの一、天狗岳に関するもの一編となっている。蓼科山に関する記録が圧倒的に多く、この山で一度評判になった観察例が伝説的に伝えられて



二人の女性登山者によって撮影されたライチョウの雌

八ガ岳におけるライチョウ目撃箇所



きた傾向が強い。

個体数に関する古記録では「千曲の真砂」に数百羽が群散していたと記してあり、「信濃地名考」では六、七羽となっている。いずれも蓼科山のものであるが、現在の蓼科山の植生や環境から考えると、せいぜい一つがいのナワバリが維持できるかどうかである。ナワバリ条件を無視して生息可能域全域を、考えられる最小のナワバリ面積で機械的に分割しても三つがいが取れるに過ぎない。

「千曲の真砂」に見られる数百羽は、たとえ誇張された表現としてもあまりに極端であり、亜高山性針葉樹林と関係して個体数の多いホンガラスとの混同があるように思えてならない。この記録から八〇年後に出た「信濃奇勝録」には蓼科山のライチョウの写生図が載っている。信州における唯一の写生図であるが記録自身は「信濃地名考」の引用であり、図は画家に描かせているため、実際にライチョウを描いたものか、形態、斑紋などホシガラスとライチョウを混ぜ合わせた描写となっている。

「信濃地名考」では雌一羽を捕えたことを記

ている。旧歴の六月末で記述からみてふ化し上経過した後一カ月以上経過したから時期的には正しい。六、七羽というのは雌を加えた数とみならず一度一家族を観察したことになる納得できる個体数となる

ところで蓼科山の裾野は森林でおおわれ、他の山岳からは完全に隔絶された独立峰である。よちよち歩きの難づれで他の山から移動して山頂近くまで来るとはほとんどあり得ないことで、観察された家族は恐らく蓼科山でふ化したものである。したがってこの時は蓼科山でも繁殖したと考えられるが、たまたまその年だけ繁殖したと考えることも可能であり、この記録だけでは恒久的に定住し繁殖しているとは判断することは困難である。

古記録を中心に眺めると、確かに蓼科山や八ガ岳一帯にライチョウがいたことが伺えるしかし、種族維持ができる程度の個体数が生息し、子孫を残しながら世代を交代して来たかどうかには多くの疑問が残される。

▼近年における発見例

登山が大衆化し始めた昭和の年代になると多くの動物学者や登山家が、それぞれの立場で、四季を通じ登山するようになり、ライチョウの発見記録が現れ始める。

数多い登山紀行文のうちで最初に記録が見られるのは、加藤泰三氏の紀行文である。これによると編笠岳と権現岳の鞍部で発見しているが残念なことに登山した時期が不明で昭

和初期といった大まかな年代しかわからない戦後になり登山人口が爆発的に増加するようになると目撃者の数が次第に増えてくる。これら発見例のうち今日まで何らかの記録が残されている九例程の中から、明らかに他の鳥との誤認であると判断できる記録や、発見地、発見日時がともに不明で資料的価値のないものを除くと、赤岳と横岳が二例、天狗岳三例、編笠岳と権現岳一例、阿弥陀岳一例となる。

例数が少ない上、誤認が含まれている可能性が強く、これらの資料からの判断は危険が伴うが、危険を覚悟で少し考えてみたい発見記録が重なる天狗岳周辺と赤岳と横岳の二地域において発見までの年数をみると、天狗岳では連続観察された年から二一年目に発見され、赤岳と横岳では一三年目の発見となる。登山者がライチョウと遭遇する確率はライチョウの生息数、登山者数、登山道が設けられている場所などと関連をもつものと考えられる。八ガ岳は登山者数や登山道の設けられ方が、北アルプスなどときわだって変っているとは思えず、それによって遭遇率が極めて低いのは、生息数が少なく、数える程のライチョウしかいないためであろう。

また、難づれが発見された場所は阿弥陀岳と赤岳、天狗岳、赤岳と横岳と、お互いに離れた地域でそれぞれ一度だけであり、発見から発見までの年数は二〇年近い間隔がある。天狗岳における連続発見の記録の場合は前年に雌と雌親が観察され、翌年は親鳥二羽だけで雌が観察されていらない。育雛期は登山の最盛期でもあるから毎年繁殖しているものとすると、もっと短い年数の間に、ほぼ同じ地域から難づれの発見例がでて良さそうである

ところで、戸隠連峰飯縄山で雌一羽が撮影され、信州大学羽田健三氏によって生息確認調査が行われたが姿が発見できなかったことがある。また、大町市郊外の平区二ツ屋地籍の原野で、飼猫が雌一羽を捕え、そのうちからは附近の原野で普通に見られる葉や実が

沢山でできたことがある。これらの地点はライチョウの主棲地と考えられる山岳から直線距離で一〇〜一七軒離れており、彼らの移動能力の強さには驚かされる。

八ガ岳連峰に最も近い山岳は南アルプスであるが、両者の最短地点直線距離は二〇軒前後であるから飛来する可能性が強い。

八ガ岳連峰で時々発見されるライチョウは南アルプスなどいづれかの山岳ではみ出した個体が飛来し、数年間生息して時には繁殖もするが、その後天敵その他何らかの理由で死亡あるいは飛去する場合と、短期間滞留した後、前述の理由でいなくなる場合があるのではなかるうか。そして、この生息状況は絶滅の論議となった明治以前の古記録の時代とあまり変っていないものと思われる。

以上駆逐で非常に大胆な推論を進めてきたしかし、八ガ岳のライチョウは大部分が厚いベールに包まれたままであり、「幻の鳥」の名にふさわしい神秘性さえもっている。

今後八ガ岳連峰へ登山した際、ライチョウを発見された方があった場合は、直ちに連絡して頂きたい。そしてライチョウを追い廻さないように、驚ろかさなないようにそっと撮影して、日時、場所、発見時の状況などを詳細に教えて頂きたい。

(大町山岳博物館学芸員)

おことわり

皆さんから募集していただきましたカモシカの名前の応募結果は、都合により次号(第一四巻六号)で発表させていただきます。

山と博物館 第14巻第5号

発行所 長野県大町市TELL大町③二

印刷所 大町山下仲町 大町山岳博物館

大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)